魅力ある授業［取材］

グローバルな学生育つきっかけに

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 医療創生科学部門
臨床薬学講座 医薬品機能生化学分野 教授
土屋 浩一郎（つちや こういちろう）（写真右）
大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
臨床薬学実務教育室 助教
阿部 真治（あべ しんじ）（写真左）

今回紹介する土屋先生の授業は、インターネットを使った「ビデオカンファレンス」で、不定期で開催されているものです。学年の枠を超えて自発的に集まった学生たちが参加します。今年で2年目に入った、最初の授業におじゃましました。部屋には大型のモニターが置かれ、そこにはすでにアメリカ・ノースカロライナ大学薬学部（以下ＵＮＣと略）の学生と准教授がスタンバイ。こちらでも学生と先生たちが資料を用意して開始を待っています。

いわゆるテレビ会議のシステムですが、かつては画像も悪く、やりとりにタイムラグ（時間差）がありましたが、現在ではハイビジョンレベルの画像と、リアルタイムの会話が可能となり、日本は朝9時、アメリカは午後8時でしたが、モニター越しであることをのぞけば、一つの教室で共に講義を受けているような気分です。

初めてということもあり、お互いに自分の名前を紹介して、授業の始まりです。事前に資料を交換しており、それに基づいて意見が交わされます。当然英語ですが、徳大生もなかなかがんばっていました。わかりにくい点は阿部先生がサポートします。阿部先生はＵＮＣ留学の経験があり、向こうのデニス・ウィリアムス准教授とは旧知の仲。

今回の授業の内容は、心不全に対する薬物治療や日本とアメリカでの患者への接し方の違いなどですが、本来の目的は、「学生たちには生で世界を感じて、グローバルに活躍できるようになってほしいのですが、留学となると経費も時間もかかります。ですからこうしたシステムを第一歩として、まず学生たちに興味を持ってほしい。英語の良いトレーニングにもなりますし、言いたいことが伝わらないもどかしさも感じてほしいんです。そして一人でも二人でも、自発的に取り組める人が出てくれれば、後の人を引っぱってくれます」と、土屋先生。自分の研究時間を割いての授業です。

「ＵＮＣへ行ったときに、あちらのサテライト授業を見て、ネットの便利さを知りました。事前の準備も大変ですが、学生たちも自分の授業の時間外で能動的に登録して参加してくるので、そのやる気に期待しています」

今後余裕が出来れば、研究室同士のセミナーもやりたいと語る先生。交流だけでなく、研究も世界同時に進歩する時代です。

先輩に続け

株式会社テレビ朝日 技術局システム開発部
北條 奈緒美（ほうじょう なおみ）

テレビ局の仕事

ロンドンハーツやミュージックステーション、相棒などの番組をご存知ですか？一度はご覧になった方もいらっしゃるかも知れません。私は現在、これらの番組を手掛けるテレビ朝日に勤めています。

テレビ局の仕事というと、アナウンサーやＡＤ（アシスタントディレクター）などがよく知られていますが（最近はＡＤが番組に出演しているのもよく見かけますね）、これら以外にも、いつどんな番組を放送するかを決める「編成」、番組を売ってお金を稼ぐ「営業」、番組作りを技術面から支える「技術」など様々あり、一般企業と同様に「経理」や「総務」といった仕事もあります。

私は現在、「技術」の部門でシステム開発部という部署に所属しています。今やテレビ局もＩＴで動く時代であり、番組編成や視聴率分析など、放送の裏側では数多くのシステムが稼働しています。これらのシステムを新しく作ったり、出来上がったシステムを維持したりするのが私の仕事です。システムに不具合があると放送に影響を与える可能性もあるため、常に緊張感を持って仕事に取り組んでいます。

研究活動に没頭した学生時代

高専卒業後、徳島大学の3年生に編入学し、学部2年、大学院2年の計4年間を徳島で過ごしました。学部の2年間は、授業や実験についていくことが精一杯で、勉強にアルバイトにと学生らしい生活が送れるようになったのは大学院に入ってからでした。

そんな学生生活で特に思い出されるのは、研究室に配属されてからの研究活動です。獅々堀教授はじめ、先輩方や同級生に支えられながら昼夜研究に没頭し、1つの研究テーマをとことん追求する面白さを実感しました。また学外の学会では、全国の大勢の専門家を前に自分の研究成果を発表するという貴重な経験をさせていただき、どんな状況でも怯まない度胸が身に付きました。これら研究活動で得た知識と経験は、社内外の方と接する機会が多い現在の職場でも大いに役に立ち、自信となっています。

■略歴

1984年7月	愛媛県四国中央市生まれ
2007年3月	徳島大学 工学部 知能情報工学科 卒業
2009年3月	徳島大学大学院 先端技術科学教育部 システム創生工学専攻 博士前期課程修了
2009年4月	株式会社テレビ朝日 入社

就職活動の体験談

幼少からテレビっ子だった私は、華やかなテレビの世界への憧れもあり、大学で習得した技術の知識を生かせるならば！と多くのテレビ局にエントリーしました。が、いざ面接が始まってみると結果は散々。企業研究と面接対策が甘く「志望理由は？」の質問にもうまく答えられない始末でした。そこから対策を打ち、どんな質問にも臨機応変に答えられるようになるには、かなりの時間と労力を要しました。

これから就職活動を控えている学生さんは、是非事前の企業研究と面接対策を十分に行って、自信を持って試験に臨めるよう準備してください。また先生やご家族のアドバイスを素直に受け入れ、常に感謝の気持ちを忘れないように。きっといい結果が待っていますよ。

後輩の皆さんへ

私が就職して感じるのは、周りの人と比較して語学力と海外経験が圧倒的に足りないことです。今やどんな企業もこれらを求めており、就職後も必ずチャンスが増えますから、是非学生の間にチャレンジしてみてください。応援しています。

テレビ朝日本社ビル

番組収録の様子